

## 緊急救援 ベネズエラ水害

災害発生：1999.12.10頃、北部を中心に10日間の集中豪雨

救援時期：1999.12.21～2000.5.31

12/17の新聞での報道により、南米ベネズエラで集中豪雨による甚大な被害が発生。死者・行方不明合わせて30,000人を超えるといわれている水害に対して、委員会を立ち上げ救援基金をを開始し、関係団体を通じて現地で活動する団体の情報収集を行った。  
 その後、現地で活動するベネズエラYMCAを通じて、被災現地の救援活動費として支援を行った。  
 救援基金総額：¥516,754 (221)

### ■ベネズエラ緊急救援委員会・会計報告■

【収入】		【支出】	
支援金(32口)	516,754	送金	440,420
		事務局運営費(支援金の15%以内)	76,334
			ベネズエラYMCAへ
			10,370 事務実費(郵送費・電話代・印刷費等)
			15,427 固定費(家賃・光熱費案分の17%)
			10,200 人件費(人件費案分の17%)
			40,337 災害救援金へ
計	516,754	計	516,754
残金			0

単位はすべて円。

※事務局運営費のうち固定費・人件費については、同時期に救援活動を行ったベネズエラ・モザンビーク・モンゴリアンカンボジア各委員会合同で、活動規模に応じて下記案分を配分します。

家賃案分(0.5ヶ月分)	78,750
光熱費案分(0.5ヶ月分)	12,000
人件費案分(1/3ヶ月分)	60,000
計	150,750

### ■これまでの経緯■

阪神・淡路大震災から5年が経ちました。私たちは、95年5月のロシア・サハリン地震を皮切りに、今まで、18回の救援活動を行っております。そして、このベネズエラで起きた水害の緊急救援委員会を立ち上げ、19回目の支援活動となりました。

### ■当初の被害状況■

#### 南米史上最悪の災害が 100,000人以上の行方不明者も

1999年12月中旬、ベネズエラ北部を中心に10日間降り続いた集中豪雨による被害は、日本時間12月17日に、第一報が入りました。ベネズエラの防災当局者は、16日(現地時間)、海岸部に近いバルガス州で、低所得者層の居住地域で発生した土砂崩れで、行方不明者が2000人になった恐れがあると発表。

死者・行方不明者合わせて3万人以上とされており、今後とも充分警戒する必要がありますとベネズエラ当局は発表している。(1999年12月17日現在)



ベネズエラ水害被災地

### ■ニュース■

【2000年3月14日発行】  
 【金井さんよりレポートが入りました！！】  
 2月16日から23日までベネズエラに入っていた、金井さんより、写真・ビデオ・その他レポートが事務局へ届きました。第1報でもお伝えしたように、軍の監視が強いようです。今現在、軍はカラカス市内にあるボリドトロという避難所に、全く民間団体が入ることを許可していません。ひどい状態です。被災者の人々が、生活していることを知られたくないのだと思うと、もちろん今回、金井さんも軍の許可が出ずに入ることができませんでした。ただ、別の避難所を訪れた際に、2人の子供もかみみなが床の上に、薄い布をひいただけの状態で見られました。そして、本当に所狭しと多くの人がいる。あそこ避難所はひどい、という話をしていました。  
 また、大きな援助は、全て軍・政府を通して、軍によって配給されているようです。  
 その地域は比較的の上流家庭の人々が別荘などを持っていて、高層のいいマンションが建ち並ぶ場所でした。しかし、マンションの階部分のほとんどが土砂に埋まり、道自体がそういったマンションの門の屋根の高さまでまぐさっていました。  
 また、ここから持ってきたものからいって、コンクリート車が入ったマンションに壁で占められ、土に埋もれて姿を見せていました。また、そのコンクリート車と同じく、もしくはそこから先、大きな巨大な石も見られました。一体そういった巨大な石はそこにとどろき、何人かの人を押しつぶしたのか、何件の家を押しつぶしたのかと考えるととても恐ろしいです。今はここから先は行くことが出来ないのです。ここから6~7km離れたところにある海岸沿いの町カマルメノのウリアという地域では、全ての家が崩壊し、人口6000人~6500人の内の2000人~2500人が亡くなったそうです。そしてそれらの死者は、まだ多くが土の下、海の底にあるそうです。  
 また、これらの地域の海岸は土砂によって約15m~30mほど埋め立てられ、海岸が遠くになっています。本当に流れていなくなり、土砂が海に流れ込みました。以前は本当にきれいで、週末には観光客でぎわっていたビーチが、今は見る影もありません。みんなが声を上げて嘆いていました。  
 これらの地域に住んでいた人々の中には、精神的ダメージを受け、しばらくは睡眠薬なしでは寝ることが出来なくなつたと言っている人たちがいます。また、全てを失い、厳しい生活を強いられ、その後精神的にダメージを受けた人たちも多いようで、本当に精神面でのケアが必要のようです。



被災地では軍を中心に避難所を統制しているようです。それらは、比較的整備されているようですが、そうではない、未だ支援が届いていない地域もあるようです。今、金井さんはその情報収集をしてくれています。その報告を受けて、今後の支援活動を検討していきたいと考えていますので、ご協力お願いします。

【事務局より】(2000年2月24日発行)  
 今現在、ホンジュラスへ留学中の金井優子さんが水害の被災地ベネズエラへ入っていただいております。続々とレポートが入ってきておりますが、どれも非常に悲惨な状況ばかりです。私たちが、今後の支援プログラムについて検討していきたいと考えていくとともに、今一度、皆様のご協力をお願いします！！よろしく申し上げます！！

【金井さんよりレポートが入りました！！】  
 この2日間にかけてベネズエラの中でも最も被害が大きかったカラカス近くの海岸沿いの地域を見てきました。見てきた地域は「ラ・グワイラ」「マクト」「ロス・コロレス」「タナグアレナ」という地域です。これらの地域全体で100,000人以上の人が亡くなったそうです。しかし、それらの死者の多くはまだ土の下、海の底にあり、発見されてはいないそうです。  
 <ラ・グワイラ>  
 ここは比較的貧しい人達に住んでいた地域です。彼らは住む場所がなく、山の斜面に雨などにより小さな家を建てて暮らしていました。山は本当に肩を寄り添うように密着して建てられていたため、大地を守る木々も全て切り倒れ大変地盤が弱ったようです。そして今回、年間に降る雨の量が1つに2日間の間に降り、(ほとんどの家が)崖崩れをおこし、この地区はほとんどが跡形もなくなっていました。ひどいことでした。  
 また、この地域の人たちは勝手にここに来て自分たちで家を建てて暮らしていたため、国側は一切ここにどのような人が一体何人暮らしていたのかということ把握していなかったため、何人の人が行方不明(埋まっているのか)なのかということが分かっていません。そのため、具体的な数字を出すことが出来ないので、ベネズエラにあるほとんどの避難所にいる人達というのはこの地区の人々たちです。  
 それでも、この地域では何とかが残った家に住み続けている人達もいます。今では電気・水道・電話がない状態にもかかわらず彼らはここに住まざるを得ないので、何故かという、他に住むことの出来る地がないのです。  
 また、今回のこの惨事に恐怖を持ち、もうここに戻って来たくないという被災者もいます。そういった彼らには精神面でのケアが必要と思われます。  
 <ロス・コロレス>  
 ここは、比較的の中流、もしくはもう少し上の層の人たちが暮らしていた地域です。しかしここは土砂というよりも巨大な大量の石によって襲われ、ここでも多くの人が、またそれらの石の下にいます。この地域のメイン通りのリゾータラナダという地域は、見渡す限り巨大な石の草原と化しています。この辺りにあった家は、今では全く見る影もありません。また、残っている家々の階部分は右から左へ倒れています。また、大きな木が木がそれらの家の壁に刺さっているという状態です。本当に無惨な状態です。この地域には全く誰も暮らすことができません。  
 <タナグアレナ>  
 ここタナグアレナの中の一地域には、213件の家があったのですが、その全てが崩壊し、ここもまた草原のように石で覆われ、全く家の影がありませんでした。そこで367人の方が亡くなったそうです。

この地域は比較的の上流家庭の人々が別荘などを持っていて、高層のいいマンションが建ち並ぶ場所でした。しかし、マンションの階部分のほとんどが土砂に埋まり、道自体がそういったマンションの門の屋根の高さまでまぐさっていました。  
 また、ここから持ってきたものからいって、コンクリート車が入ったマンションに壁で占められ、土に埋もれて姿を見せていました。また、そのコンクリート車と同じく、もしくはそこから先、大きな巨大な石も見られました。一体そういった巨大な石はそこにとどろき、何人かの人を押しつぶしたのか、何件の家を押しつぶしたのかと考えるととても恐ろしいです。今はここから先は行くことが出来ないのです。ここから6~7km離れたところにある海岸沿いの町カマルメノのウリアという地域では、全ての家が崩壊し、人口6000人~6500人の内の2000人~2500人が亡くなったそうです。そしてそれらの死者は、まだ多くが土の下、海の底にあるそうです。  
 また、これらの地域の海岸は土砂によって約15m~30mほど埋め立てられ、海岸が遠くになっています。本当に流れていなくなり、土砂が海に流れ込みました。以前は本当にきれいで、週末には観光客でぎわっていたビーチが、今は見る影もありません。みんなが声を上げて嘆いていました。  
 これらの地域に住んでいた人々の中には、精神的ダメージを受け、しばらくは睡眠薬なしでは寝ることが出来なくなつたと言っている人たちがいます。また、全てを失い、厳しい生活を強いられ、その後精神的にダメージを受けた人たちも多いようで、本当に精神面でのケアが必要のようです。

被災地では軍を中心に避難所を統制しているようです。それらは、比較的整備されているようですが、そうではない、未だ支援が届いていない地域もあるようです。今、金井さんはその情報収集をしてくれています。その報告を受けて、今後の支援活動を検討していきたいと考えていますので、ご協力お願いします。

【2000年2月20日発行】  
 【事務局より】  
 ベネズエラで水害が発生してから2ヶ月が経ちました。その後の状況がなかなか情報収集出来ずに、ニュースが遅れてしまったこと、お詫び申し上げます。  
 このベネズエラ水害の被災地に、現在ホンジュラスに在住の金井優子さんに現地に入ってもらっています。期間は、2月15日(約1週間)ほどです。現地で活動するベネズエラYMCAを通じて被災地に入り、視察を行う予定になっております。  
 その報告により、今後の支援活動の展開を考えていきたいと思います。

【金井さんより第1報が入りました！！】  
 2/16  
 空港から街の中心に向かうまでに被害を受けた一部の地域を見ることが出来ました。もともとカラカスは盆地にあり、平地が少なく、カラカスに住む80~70%の人達は貧しい人達で彼らは山の斜面に何か家を建てて暮らしています。  
 見るからに少し雨が降ればすぐに崩れてしまいそんな不安定な地域に暮らしています。今回の被害は本当に不安定な地に家を建てて暮らさざるを得なかった貧しい人々を襲った様です。

2/17  
 午前中にベネズエラのNGO団体とコンタクトを取り、彼らと共にカラカスの中心にある一つの避難所を訪ねました。ベネズエラのほとんどの避難所が政府・軍の統制下に置かれているため、私が訪ねた避難所にも軍の人達から彼らから許可をもらって避難所の撮影をさせてもらいました。この避難所は約700の家族が暮らしています。  
 だいたい一つの部屋(約8畳ほどの広さです)に2家族が暮らしています。(組織化されているようです)大変衛生面に気が配られていて、大変きれいでした。この避難所では今、精神面における援助が必要と思われます。  
 しかし、本当にひどい状態を生活している人達がいる避難所には軍の許可がないと入ることが出来ません。しかし今現在許可を申請しており、おそろしく来週には取れるのではないかと考えられます。明日はここから約2時間ほど離れたところにある「レンシア」という街にある2カ所の避難所を訪問する予定です。

### ■2000.1/24■

第3報  
 死者推定3万人以上、被災者約30万人  
 12月中旬に南米ベネズエラを襲った豪雨で、多くの被害をもたらしました。その後の状況をお送りいたします。(なかなか現地の情報が入らなかつたため、ニュースが遅れてしまったことをお詫びいたします。)

<カリタス・ベネズエラより>  
 ○カラカス  
 大量の土石流に襲われ、ハイラインは埋まり、人々の住居や公共施設、インフラなどが破壊、あるいは水浸しになった。死者は膨大な数に上り、被害は甚大である。町の光景は「地獄」そのものであり、また、この悲劇を味わったすべての人々は精神的に疲労しており、深刻なうつ病の状態である。

○バルガス  
 この州は、カラカスの北に位置する沿岸地帯を含んでおり、ここでは、Availaにある山の北の斜面の一部が崩れて、集落に落ちてきた。沿岸地帯は全域、壊滅状態のまま、地面は数メートル上昇し、土砂崩れを引き起こしている。ビルは完全に崩壊するが、数階分の高さまで泥が詰まっている。情報伝達の手段は断たれ、自動車は土砂の塊にはまり込んでいる。  
 La Guairaの港では、コンテナが無秩序に集められ、混乱の様相を呈している。また、国際空港もまた、大災害の被害を受けており、機能が大きく制限されている。

○その他の地域  
 ミランダ州、ヨロップ州、ズリア州、ファルゴン州の被害も甚大で、多くの死者・負傷者・行方不明者を出している。  
 ○被災者の状況  
 ベネズエラ政府は、20万人の被災者を各州の公的な施設に避難させることを取りかかっている。しかし、数万人の被災者は、自分たちの住んでいる地域を離れることを懸念し、政府からの援助を受けない地元教会で避難をしている。  
 ○カリタス・ベネズエラの動き  
 カリタスベネズエラ及び、被災者を支援している各司教区の活動を、厳密な調査をするこ、欠乏状況を改善するため、何らかの生活手段を提供すること。(カリタスベネズエラの文章がスペイン語で来たため、AYUCAの土屋さんに翻訳してもらいました。)

<国連人道問題調整事務所(OCHA)のホームページより>  
 1. カリタス国連駐在員事務所によると、現在の死者数は約30,000人とみられる。また、バルガス州では約100,000人が避難し、その内35,000人が現在カラカスの避難所に、15,000人がその他の都市の避難所にいるとみられる。  
 2. 被災者が1月30日までの1週間続いたため、多くの州で被害が出た。タチラス州では、2,600人が洪水の地域から仮設の避難所に避難した。ベネズエラの各地で、洪水・土砂崩れによる被害が拡大している。給水システムの故障による給水問題の深刻化などが報告されている。  
 3. 保健・社会開発省(UNO/PAHO)やアメリカ保健機構が用意した情報によれば、Vargas, Miranda, Distrito Dederal, Falcon, Yaracuyの各州で、9つの病院と251の外來専門の医療センターが様々なレベルで影響を受けている。  
 4. 教育省の報告によると、23の学区で非常事態宣言がなされている。通常の授業は1月10日から再開される予定だった。  
 この分野の被害状況は以下の通り。

影響を受けた学校:	Vargas 46校
	Miranda 15校
	Zulia 12校
	Falcon 13校
仮の避難所として使われた学校:	Vargas 28校
	Miranda 18校
	Zulia 5校
	Falcon 回答なし
避難した生徒:	Vargas 13,000名
	Miranda 回答なし
	Zulia 2,000名
	Falcon 3,000名

(OCHAのホームページをボランティアの大橋さんに翻訳してもらいました。)

<ベネズエラYMCAより>  
 大半の機能は崩壊しており、軍隊・政府によって統制されている。この状況下でNGOの救援活動への参画は非常に制限されているが、特別許可を得て救援活動を行う予定。  
 <南米在住の日本人の方から情報を頂きました>  
 1. 被災地で活動するNGOや、市民活動団体について  
 defensa civilという政府の民間防災局があり、これにたつらなる形で各地に公務員のグループ(消防士、医師、看護婦など)とボランティアのグループがあるようです。後者は日本の消防団のようなものが多くはみられませんが、飛び入りや特に訓練資格がなくとも活動しているようです。自然発生的な団体もあつたようです。現地の救援活動は、このdefensa civilが主導していることになっており、NGOの調整役もここが窓口になっているとのことでした。

2. 発生後約1ヶ月になるが、被災者の方たちは今、ベネズエラ政府(家を手失した人たちは軍の基地や教会に収容されていきました(推定15万人前後)。今もこの状態が続いていると思われる。一方、家の損傷が少なく、残った人たちの生活は電気、水道等、また、完全に回復したと見られるが、食糧、医薬品など物資の不足で約40万人に上る被災者の栄養失調や疫病が懸念されており、国連も同日、国際社会に対して緊急支援の拡大を要請した。  
 3. ベネズエラ政府の当面の救済施策  
 軍人出身のチャヤス大統領は、国際的な援助や独自の復興計画で被災者に手を差し伸べる姿勢をみせています。また、道路や社会施設などインフラ面の復旧に追われ、個々の被災者への支援策は明確になっていないのではないかと、思います。

4. 子どもたちや女性、障害者の人たちに関する特別な支援策  
 被災者には多くの女性や子供たち(孤児も少ない)と見えますが、実数等不明が含まれていますが、女性とか、子供とかで特別な措置はないようです。また、各国からの支援物資などをみると、幼児用の粉ミルクや生理用品など、援助する側はこうした人々も視野に入れていたようです。また、軍主導の救援作戦に、米国のをはじめとする中南米、欧州の各国が軍を中心に支援部隊を送つたため、結局、子供、女性らへの支援で足りなかつた点は多々、あるのではないかと、思います。

### ■1999.12/25■

第2報  
 <ベネズエラ水害>今世紀最大の災害か>  
 第1報が日本に入ってから、1週間が過ぎました。時間が経つにつれて、被害の甚大さが、浮き彫りになってきています。この間、事務局じいたしましては、ベネズエラ大使館や、その他各関係機関を通じて情報収集に努めております。

・12/25朝日新聞より  
 ベネズエラ北部の豪雨災害で、同国軍は23日、被災地のバルガス州から計14万人を救出し、救出作業がほぼ完了したことを明らかにした。死者数は少なくとも15,000人とされ、海岸部数十キロの範囲が土砂に埋もれ、道体をすべて確認するのは不可能な状態だ。同国政府は復興基金として7億7500万ドルを用意した。

・12/24毎日新聞より  
 集中豪雨により今世紀最大の被害が出ている南米ベネズエラの政府は23日、約10日間わたつた救出作戦を同日限りで中止し、今後は生存者への支援作業に重点を置く方針を決めた。死者・行方不明者は計13万人を超えると思われるが、食糧、医薬品など物資の不足で約40万人に上る被災者の栄養失調や疫病が懸念されており、国連も同日、国際社会に対して緊急支援の拡大を要請した。

・中南米新聞より  
 ベネズエラのボセ・ロハス蔵相は12月22日、テレビ・ラジオを通して、水害被害の大きい同国北部地方の復興開発の信託基金を創設する考えを明らかにした。信託基金の額については言及しなかつた。  
 ベネズエラ北部は12月21日、集中豪雨による緊急支援としてスペインのカナリア諸島自治州政府が80万ドルおよび日本政府が50万ドルそれぞれ贈つた。と発表した。なお、日本政府はこれまでにテント、毛布、タオル、石鹸の緊急援助物資(4,986万円相当)を供与している。

・ロイターより  
 豪雨による大災害で、全国で約40万人が家を失い、民家6万軒が全壊または一部損壊したほか、1000キロの道路が洪水による被害を受けた。

・国連人道問題調整事務所(OCHA)より  
 昨年中米をおそつたハリケーン「ミッチ」の3倍以上の被害をもたらしたベネズエラの水害は、30,000から50,000人の犠牲者を出す見込まれている。電気、電話、水はいくつかの地域は(復旧)した。カラカス市の水の供給は、平常に戻ると報告されている。カラカス市近郊には、2つの国際空港とSimon Bolivar空港の2つの国際空港は、営業を再開してはいない。La Guaira港は3~4週間以内には再開される見通し。また、カラカス・La Guaira間の道路は閉鎖されたまま。(人が通ることは出来る。)

ベネズエラ当局は、救命救出の緊急段階から被災者を避難させ、キャンプ場をコーディネートして、第2段階へ移行している。と述べた。  
 ・ベネズエラ大使館より  
 カリブ海に面した沿岸地帯や特にカラカス及びバルガス州の被害が著しく、この地域では、川の氾濫、埋没の決壊が起こり、瞬時にばメートルにも達した洪水で村自体が流失してしまつたところもありました。  
 学校、病院、港湾、空港、トンネル、橋梁、道路等のインフラ関係への被害も深刻なものがあります。その復興には、今現在の見積りでは150億から200億ドルを要し、最低2年はかかるといわれています。

その他、医薬品(はじめ、救援物資)の資料も送られております。  
 ・AMDAより  
 12月21日に、日本から1名のスタッフを含む、6名の多国籍緊急救援チームを派遣。

### ■1999.12/22■

第1報  
 <低所得者層の居住地域を中心に10日間降り続いた集中豪雨による被害は、日本時間12月17日に、第一報が入りました。ベネズエラの防災当局者は、16日(現地時間)、海岸部に近いバルガス州で、低所得者層の居住地域で発生した土砂崩れで、行方不明者が2000人になった恐れがあると発表。(カラカス16日共同)

このように第一報を受けて、被害の状況から、「災害体験を持つKOBE」の役割として救援活動を発信していくことの大切さを過去の災害救援の中から認識し、19回目の緊急救援委員会を発足します。以下、20日現在の情報です。>  
 死者・2000人以上(推定死者数25000人(現地地元のリポーター報道))  
 首都カラカスでも、山すそに密集した低所得者層の居住地域を中心に土砂崩れや、土石流による被害で約100人の死者、3200人が家を失った。また、カラカスとシモン・ボリバル国際空港を結ぶ道路も寸断、事実上の閉鎖状態。  
 政府は23州の内8州に非常事態宣言を出した。15、16日以降、被災地に約12000人の軍隊を投入して、救助・捜索活動を続けている。シモン・ボリバル国際空港には避難民が多数連れ、テントで埋め尽くされている。海軍の艦艇も臨時避難所となっている。  
 今後、被害状況が確認されるにつれ犠牲者数は増える見通し。食料・医療支援も深刻な問題となってくる事が予測できる。

委員会発足にあたり、募金並びに委員会への参加団体を募集しております。トルコ・台湾と続いてのことですが、皆様のご協力をお願いします。

「ベネズエラ水害・緊急救援委員会」を立ち上げるにあたって、12/21関係団体に以下のようなお願いを発信致しました。  
 阪神・淡路大震災以後、私たちKOBEのニュースにある「ベネズエラの水害被害」の報を聞き、極めて甚大な被害であると判断し、ここに「ベネズエラ水害・緊急救援委員会」を発足する。委員長は村井雅清とする。2月に貧困層の被害が集中しており、現地の委員会に寄せられた支援金は、今後速意情報収集をしつつ、現地の信頼できるNGOをとおして貧困層の被災者の生活再建に役立てたいと思つています。3.現地の状況を見る、場合によっては委員会からの現地派遣を検討します。  
 4.委員会からの救援活動期間は、当面約1ヶ月とする。(3月末まで)  
 5.皆様から寄せられた支援金の内、全体の15%を限度として事務局運営費および管理費に充当させていただきます。(呼びかけ文より抜粋)

ベネズエラのトップ>>  
 ■委員会加盟団体■

エイディティ災害救援研究所、神戸華僑協会、神戸学生・青年センター、神戸国際協力交流センター、神戸YMCA、コープこうべ、災害救援ネットワーク北海道、震災から学ぶボランティアネットの会、たかたか救援センター、日本緊急援助協賛会(AYUCA)、都市生活復興センター、日本カーディアン・エンジニアス、日本青年奉仕協会(JYVA)、阪神大震災地元NGO救援連絡会議、ひこね国際交流会 VOICE、被災地NGO協働センター、兵庫国際文化交流協会、「ゆめ・風車基金」(以上18団体)

先ず来る新聞報道からのニュースにある「ベネズエラの水害被害」の報を聞き、極めて甚大な被害であると判断し、ここに「ベネズエラ水害・緊急救援委員会」を発足する。委員長は村井雅清とする。2月に貧困層の被害が集中しており、現地の委員会に寄せられた支援金は、今後速意情報収集をしつつ、現地の信頼できるNGOをとおして貧困層の被災者の生活再建に役立てたいと思つています。3.現地の状況を見る、場合によっては委員会からの現地派遣を検討します。  
 4.委員会からの救援活動期間は、当面約1ヶ月とする。(3月末まで)  
 5.皆様から寄せられた支援金の内、全体の15%を限度として事務局運営費および管理費に充当させていただきます。(呼びかけ文より抜粋)

ベネズエラのトップ>>  
 ■委員会加盟団体■

エイディティ災害救援研究所、神戸華僑協会、神戸学生・青年センター、神戸国際協力交流センター、神戸YMCA、コープこうべ、災害救援ネットワーク北海道、震災から学ぶボランティアネットの会、たかたか救援センター、日本緊急援助協賛会(AYUCA)、都市生活復興センター、日本カーディアン・エンジニアス、日本青年奉仕協会(JYVA)、阪神大震災地元NGO救援連絡会議、ひこね国際交流会 VOICE、被災地NGO協働センター、兵庫国際文化交流協会、「ゆめ・風車基金」(以上18団体)